

大曲市角間川商店街の変遷と商業活動

石 黒 道 浩

キーワード：大曲市角間川町 商店街 業種構成 商業地理学

I はじめに

日本における商業地域は、1960年代以降のモータリゼーションの進展と、1970年代以降の郊外立地を志向する大型小売店の急増によって大きく変化した。大型店の集客力が中心商店街の離心を招き、零細な個人経営店舗は大幅に減少した（岩間ほか，2004）。

大曲市角間川町は、雄物川と横手川の合流地点を有し、雄物川最大の河港として江戸末期から明治後期にかけて非常に繁栄した町である（大曲市，1999）。そこで本研究では、大曲市角間川町の中心商店街を対象として、商店街の業種の変遷について検討した上で、商店経営が続けられている理由を明らかにすることを目的とする。

角間川町の中心商店街（以降、角間川商店街とする）は、角間川町北端部に位置し、北から東本町、西本町、東中上町、西中上町、中町頭の一部、西上町の一部から構成される。米や物資を貯蔵するために作られた倉庫である浜蔵や、雄物川の舟運で財を蓄えた地主の旧家が現存し、歴史的な街並みを残している。角間川商店街に面する住宅、店舗のほとんどが間口の狭い短冊状の敷地を有している。

II 角間川商店街の変遷

第1図によって角間川商店街の業種構成の変遷を検討する。

1. 1944年頃の業種構成

1944年頃の角間川商店街には、小売業60店舗、サービス業11店舗、飲食店5店舗が立地していた。小売業の内訳は、最寄品小売業47店舗、買回品小売業12店舗、その他小売業1店舗であった。街路全域にわたって店舗が連担し、賑わいをみせていた様子がうかがわれる。かつての河港に近接する商店街北部には旅館、クラブ、飲食店などが立ち並んでおり、飲

楽街の様相を呈していた。

2. 1964年頃の業種構成

1964年頃の角間川商店街には、小売業61店舗、サービス業13店舗、飲食業3店舗が立地していた。小売業の内訳は、最寄品小売業51店舗、買回品小売業9店舗、その他小売業1店舗であった。1944年頃の業種構成と比較すると、最寄品小売業が増加した一方で、買回品小売業が減少している。町丁別にみると、店舗が減少した町丁と増加した町丁が混在していた。店舗数に大きな変化はないが、店舗の廃業と新規の出店が多くみられた。また、既存の店舗における業種の変化もみられた。したがって、1944年から1964年の期間は、店舗の交替が多くみられた時期といえる。

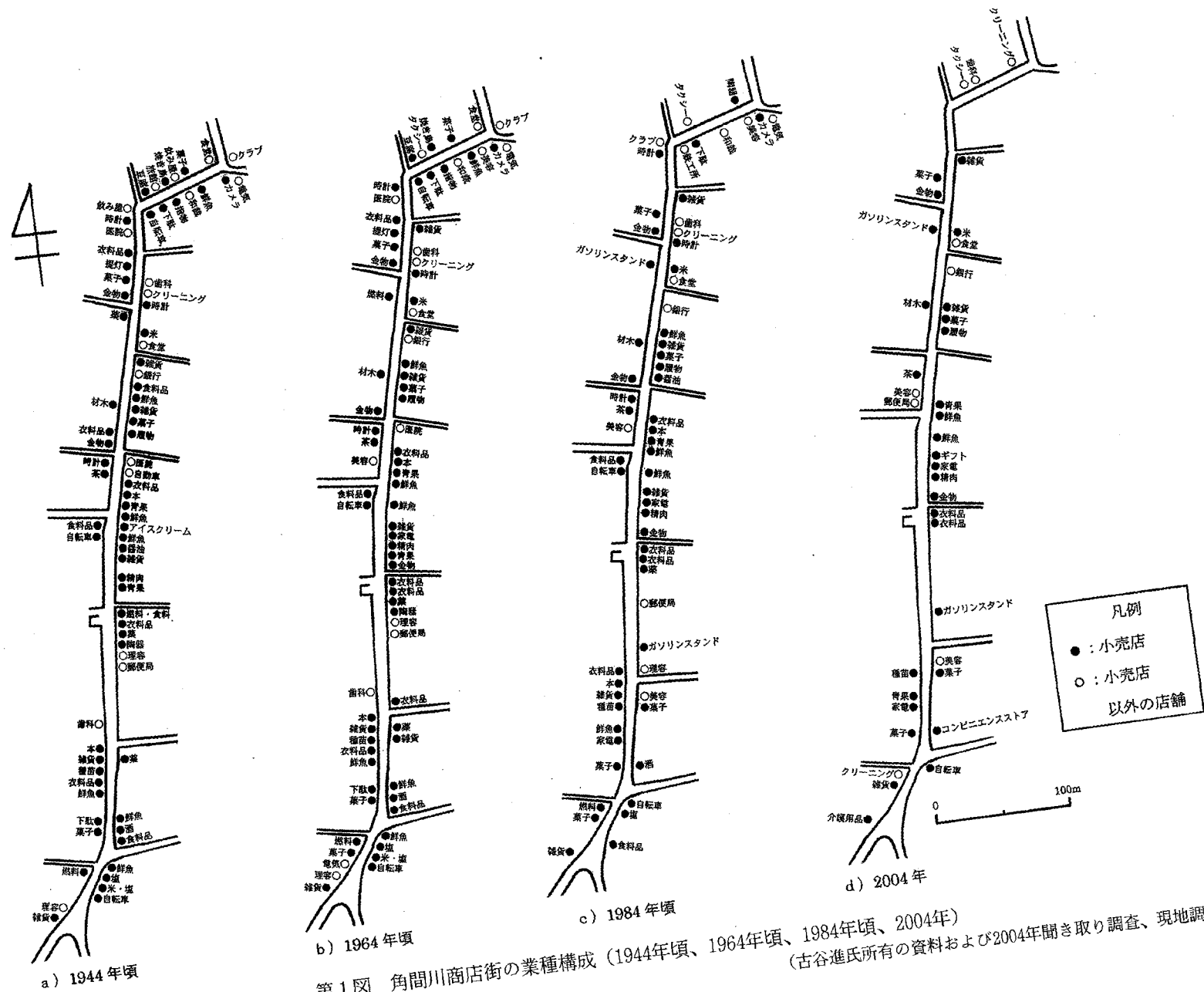
3. 1984年頃の業種構成

1984年頃の角間川商店街には、小売業49店舗、サービス業11店舗、飲食業2店舗が立地していた。小売業の内訳は、最寄品小売業40店舗、買回品小売業8店舗、その他小売業1店舗であった。1964年頃の業種構成と比較すると、店舗数は15店舗が減少した。すべての町丁において店舗の減少がみられ、とくに商店街北部における店舗の減少が顕著である。また、提灯店、豆腐店、下駄店など製造販売専門店の廃業が多くみられた。

4. 2004年の業種構成

2004年の角間川商店街には、小売業29店舗、サービス業6店舗、飲食業1店舗が立地している。小売業の内訳は、最寄品小売業24店舗、買回品小売業2店舗、その他小売業3店舗である。1984年頃と比較すると、店舗数は24店舗減少しており、1964年頃から1984年頃の期間と同様に、商店街北部における店舗の減少が顕著である。

以上4つの年次における業種構成の変遷から、以



下のことがわかった。1944年頃と2004年の店舗数を比較すると、最寄品小売業は47店舗から24店舗に減少した。買回品小売業は12店舗から2店舗に減少した。店舗数でみると最寄品店の減少が激しいが、比率でみると買回品店の減少率が大きい。また、廃業した店舗の多くは住宅に変化しており、街路には“しもた屋”が立ち並んでいる。限られた商品を扱う専門店の減少が多くみられるのに対し、雑貨店など比較的多様な商品を扱う店舗、および和洋菓子店や鮮魚店など特殊な技術や免許を必要とする業種は残存している。

河港に近接した商店街北部が歓楽街と飲食店街、さらには商店街の中心としての機能を果たしていたが、年を経るにつれてその地位は失われてしまった。

Ⅲ 角間川商店街における商業活動

第2図は角間川商店街における小売店の商業活動を示した図である。

1. 職住関係と家族・従業員数

角間川商店街における小売店は、2店舗を除いた27店舗が職住一致である。店舗の多くが建物の一階街路側に店舗を構え、一階奥あるいは二階に居住スペースが存在する。またほとんどの店舗が家族経営であり、1～3名のごく少人数で経営が行われている。

2. 後継者問題と経営者の意識

後継者がいると答えた店舗は6店舗のみで、それ以外の店舗はいない、または不明と答えた。後継者がいると答えた店舗は、経営に積極的に取り組んでいる傾向がみられた。経営者の年齢をみると全体的に高齢化が進んだ状態にあり、自らの代で廃業を考えている経営者も存在する。商店経営における収入のみでは生計を維持できない店舗も存在し、年金収入に頼っているという現状もみられた。

たとえば、店舗番号26番の経営者は農家に育ったため、商店経営の知識や経験が全くない状態から、1964年に駄菓子店を開業した。現在、商店経営にお

業種分類	主な取扱品	開業年次	経営者の年齢	家族・従業員数	各店舗の開業・業種の変化・移転の詳細 (年)
1	ア 青果	1860?	70	◎	鮮魚▲ 青果▲
2	ア 鮮魚、加工食品	1868	65	◎○	鮮魚▲
3	オ 食料品、雑誌	1870-80	90	◎/●○/○◎ [■●●●●]	鮮魚▲ 酒△ CVS△
4	ウ 米	1870-80	75	◎○/●○/●	米▲
5	カ クリーニング	1870-80	60	○/●◎/●	米・燃料▲ クリーニング△
6	ア 鮮魚、加工食品	1885	?	◎○/○◎	鮮魚▲
7	オ ギフト	1890?	70代	◎○/◎○/●	雑貨▲ ギフト△
8	イ 和洋菓子	1892?	81	◎○/◎○/○	菓子▲
9	イ 和菓子	1907?	74	◎○	菓子▲
10	エ 婦人服	1910?	87	◎○/◎○/○	雑貨・燃料▲ 衣料品△
11	オ 介護用品	1920?	50	◎/◎	介護用品△
12	ア 精肉	1925	67	◎○/●	精肉▲
13	エ+カ 婦人服、クリーニング	1930	50代	◎○/○	衣料品▲
14	イ 洋菓子	1940?	89	◎/◎○/●	菓子▲
15	オ 種苗	1941	59	◎/◎○	種苗▲
16	ウ 茶	1948	63	◎/◎○/●●●●	茶▲
17	オ ガソリン、ガス	1948	36	◎/◎○/◎ [■●●●●●●●]	燃料▲ガソリン△
18	ウ+オ 雑貨、健康食品	1949	70	◎/◎○	雑貨▲
19	オ 電化製品	1949	60	◎○/◎○/● [■]	電化製品▲
20	ウ 駄菓子、雑貨	1952	50代	◎/◎○/◎●●	駄菓子▲
21	オ 服物	1955?	68	◎○	服物▲
22	ア 青果	1959	66	◎/◎○/◎○/○	青果▲
23	オ 金物	1960	?	◎○/◎	金物▲
24	オ 雑貨、生花	1961	73	◎○/◎	雑貨▲
25	オ 金物	1963	71	◎/◎	金物▲
26	ウ 駄菓子	1964	68	◎/○	駄菓子▲
27	オ 自転車、バイク	1972	50代	◎/◎	自転車▲
28	オ 電化製品	1972	55	◎/◎	電化製品▲
29	カ クリーニング	1974	?	◎/◎○/○	クリーニング▲

ア：生鮮食料品小売業 エ：衣料品小売業

イ：菓子小売業 オ：その他小売業

ウ：飲食料品小売業 カ：その他

◎：経営者

●：男性

○：女性

■：従業員

▲：店舗の開業

△：業種の変化

▽：店舗の移転

第2図 角間川商店街における小売店の商業活動（2004年）

注1) 5番、29番は以前小売店であったため、調査対象とした。

注2) [] 内は経営に携わる人物、/は世代の違いを表す。

（2004年聞き取り調査より作成）

ける収入のみでは生計を維持できないため、年金収入に頼っている状態である。しかし、まれに来店する顧客のため、また、40年以上続けてきた商店経営に強い愛着をもっているため、「体が動くうちは廃業するつもりはない」という。

店舗番号13番の店舗は、1987年に当時の経営者が死去したため、その妻が経営者となり青果店に業種を変えた。現在、子どもは実家を離れて働いているため、経営者は店舗奥の居住スペースに一人で暮らしている。聞き取りによれば、「成り行きで経営を続けている」状態にあるが、来店した顧客と会話することによって、「生活に張りが出るとともに、ボケ防止にもなる」という。

3. 周辺住民とのつながり

角間川商店街における店舗では、新規の客が来店して商品を購入していくことはごくまれで、近隣に居住する顔なじみの顧客が大部分を占める。そのため商店経営以外の普段の交流が非常に重要である。来店した顧客との会話や、修理などで訪れたお宅での会話を楽しむ経営者も多くいることがわかった。また、周辺住民との会話を楽しむためのスペースを設置している店舗も存在し、商店経営以外における人と人との強い結びつきが感じられた。

たとえば、店舗番号6番の経営者は、以前には関東地方のデパートに勤務していたが、実家に戻りギフトショップを継いでいる。しかし、デパート勤務時に培った経営戦略やノウハウが、角間川商店街ではまったく役に立たず、「いかに日常的な人とのつながりを大事にするかということが重要である」という。

店舗番号28番の店舗の経営者は、以前には秋田市の電器店に勤務していたが、1972年に実家のある角間川町に戻り電器店を開業した。経営者の長男は2000年に横浜市から実家に戻り、電器店を手伝っている。現在では販売よりも修理が大きな割合を占め、顧客の多くは角間川町内の住民である。また、修理の依頼を受けて訪問したお宅で、お茶を飲みながら会話することを楽しいと感じている。

店舗番号18番の店舗は、1949年に雑貨店として開業した。現在は雑貨以外に同一メーカーの健康食品および化粧品を扱っている。聞き取りに訪れた際に、店舗の端に椅子とテーブルが設置されており、そこ

で会話を交わす年配の女性たちの姿が見受けられた。

IV おわりに

角間川商店街において廃業した店舗の多くは、住宅に変化している。したがって商店街の店舗数は大きく減少しているものの、世帯数は維持されてきた。角間川商店街における店舗は、ほとんどが自己所有地で経営を行っている。そのため家賃などの固定経費を捻出する必要がなく、商店収入のみで生計を維持できない場合でも、年金収入などによって廃業を免れ経営を続けている事例が多い。また何十年と続けてきた商店に対して、強い愛着を感じている経営者の意識も明らかになった。

角間川商店街は伝統的商店街であるため、とくに高齢者世代において住民同士のつながりが強い。同商店街においてはほとんどが顔なじみの顧客である。そのような顧客との会話やふれあいが大きな楽しみとなっている経営者が多く存在した。廃業することによって、その関係が絶たれてしまうのではないかという不安も、商店経営を続けることに大きく関わっている。

角間川町には、観光資源となり得る旧家の黒壁や浜蔵が現存している。商店経営者の中には角間川町を歴史の町として再生しようという動きがあり、今後の課題となっている。

本稿の作成にあたり、秋田大学教育文化学部の松村公明先生から終始貴重なご助言とご指導を頂きました。資料収集および聞き取り調査では、大曲市商工会議所南部地区協議会の方々、角間川商店街各商店の皆様から温かいご協力を頂きました。末筆ながらここに深く感謝申し上げます。

文 献

- 岩間信之・佐々木緑・大橋智美・駒木伸比古・米澤郁人・F.アマディ ネジャド (2004): 古河市における商業構造の再編とその要因, 地域調査報告, 第26号, 41-74.
大曲市 (1999): 『大曲市史 第二巻 通史編』大曲市, 962P.